

飯田古墳群

範囲確認調査報告書

—令和元～3年度—

2023年3月

長野県飯田市教育委員会

飯田古墳群
範囲確認調査報告書

—令和元～3年度—

2023年3月

長野県飯田市教育委員会

例言

- 1 本書は、長野県飯田市における史跡飯田古墳群保存活用を目的とした範囲確認調査の報告書である。
- 2 調査及び報告書刊行にあたり、国宝重要文化財等保存・活用事業として国庫補助金を活用した。
- 3 本書で報告する内容は、令和元年度から令和3年度（2019年度から2021年度）に範囲確認調査を実施し、令和4年度（2022年度）に報告書刊行にかかる整理作業を実施した。
- 4 調査は、飯田市教育委員会が直営で実施した。対象年度における調査体制は以下のとおりである。

(1) 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 代田 昭久（～令和3年度） 熊谷 邦千加（令和4年度）					
調査担当者	澁谷 恵美子					
作業員	伊藤 和恵	伊東 裕子	今村 文一	木下 由紀子	関島 修	
	関島 真由美	中田 恵	樋本 宣子	福澤 育子	宮内 真理子	
	森山 律子	久田 誠	横前 正富	吉川 悦子	吉村 美保子	

(2) 事務局体制

飯田市教育委員会	
教育次長	今村 和夫（～令和2年度）
参与（教育次長事務取扱）	松下 徹（令和3年度～）
文化財保護活用課長	馬場 保之（～令和3年度） 宮下 利彦（令和4年度）
文化財施設整備担当専門幹	関島 隆夫（～令和3年度）
文化財保護活用課長補佐兼文化財担当主幹	宮澤 貴子（令和3年度～）
文化財保護活用課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行
文化財保護活用課文化財保護担当専門主査	吉川 金利（令和3年度）
文化財保護活用課文化財保護係	澁谷 恵美子（～令和3年度） 木下 正史（令和4年度） 春日 宇光

(3) 指導・協力

長野県教育委員会 文化財・生涯学習課

- 5 調査略号は以下のとおりとした。
姫塚古墳 令和元年度調査 : AGM3365
姫塚古墳 令和2年度調査 : AGM3369
大塚古墳 令和3年度調査 : KOTK2012
- 6 本件に伴う業務委託は、以下のとおりである。
基準点測量・地形測量・標高析出：株式会社小林コンサルタント（現・株式会社コパコン）
- 7 発掘調査は澁谷恵美子が担当した。
- 8 本書は春日宇光が執筆・編集した。
- 9 調査の記録類および出土遺物は飯田市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系による。
- 2 本書で扱う史跡の名称は次のとおりである。
史跡飯田古墳群（姫塚古墳）
史跡飯田古墳群（大塚古墳）
本書ではそれぞれ「姫塚古墳」・「大塚古墳」と表記する。なお、「大塚古墳」は飯田市埋蔵文化財包蔵地地図（2015年作成）では「桐林大塚古墳」として記載されているため、抄録では記載名を用いた。
- 3 遺構には文化庁文化財部記念物課監修 2010『発掘調査のてびき 一集落遺跡発掘編一』p242「表9 遺構記号」に基づき以下の略号を用いた。
小穴（ピット）：SP 性格不明遺構：SX
- 4 遺構・遺物図版で共通して使用する記号等は、以下のとおりである。
S：岩石 P：土器・埴輪 遺物の出土位置：●
- 5 実測図の断面について、埴輪は白抜き、須恵器は黒塗りで表示した。
- 6 土層観察については小山正忠・竹原秀雄 2015『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。本報告図版上の記載も上記文献に準拠したうえで、土層番号、土色の略号表記（色相・明度／彩度）、土性の略号表記の順に示した。

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 飯田古墳群の概要	1
第2節 調査の目的と経過	2
第2章 調査の成果	4
第1節 姫塚古墳の調査	4
第2節 大塚古墳の調査	11
参考・引用文献	16
写真図版	

第1章 調査の概要

第1節 飯田古墳群の概要

飯田市は標高3000メートル級の高峰が連なる木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那盆地の南側に位置する都市である。盆地の中央は諏訪湖より発した一級河川・天竜川が南流し、その両岸に段丘が発達する特徴的な地形を有する当地は、岐阜、愛知、静岡などの諸地域と長野県中・北部方面とを結ぶ交通の要衝として古来より発展をみせてきた。

飯田古墳群は、飯田市域のうち、天竜川右岸の南北約10km、東西約2.5kmの範囲に築造された前方後円墳22基、帆立貝形古墳5基の総称と定義されている（飯田市教育委員会 2012ほか）。これらは市域の北から座光寺、上郷、松尾、竜丘、川路の5地区に分かれて分布しており、それぞれの地区名を冠した「単位群」によって一体的な古墳群としてとらえられ、飯田古墳群が構成される。平成28年、このうち13基が史跡飯田古墳群として国の指定を受けている（図1・表）。

飯田古墳群の築造は古墳時代中期中葉頃に開始する。この段階における首長墓は前方後円墳と帆立貝形古墳が中核をなす。各単位群の築造の中心域は天竜川右岸の中低位段丘上で、現在の国道151号線沿線とおおむね一致をみせる。一方、三穂地区や川路地区南部のように、山間地にも円墳によって構成される古墳群が発達する。当該時期にみられる大きな特色として、墓域を中心に馬の埋葬が多数確認されていることが挙げられる。馬埋葬の代表的な事例として、座光寺の新井原古墳群・高岡古墳群、上郷の宮垣外遺跡、松尾の茶柄山古墳群などがある。後期には新たな埋葬主体部として横穴式石室が導入された。分布域もそれまでに古墳の築造がみられなかった天竜川東域の山間部にまで広がりをみせる。各地区に展開した首長の墳墓には巨石を使用した横穴式石室が採用されたが、その構造は畿内型両袖式、無袖式、片袖式、竪穴系横口式など多種多様であり、系譜をめぐって様々な議論がある。後期末まで古墳の築造が続くが、竜丘の馬背塚古墳、松尾のおかん塚古墳を最後に前方後円墳の築造は終焉をむかえ、寺院の造営へ移行していく。

表 飯田古墳群一覧

地区	古墳名	形状	備考	地区	古墳名/史跡名	形状	備考
座光寺	高岡第1号古墳	前方後円墳	史跡	竜丘	大塚古墳	前方後円墳	史跡
座光寺	北本城古墳	前方後円墳		竜丘	鏡塚古墳	帆立貝形古墳	史跡
座光寺	新井原12号古墳	帆立貝形古墳		竜丘	鏡塚古墳	帆立貝形古墳	史跡
上郷	飯沼天神塚(雲彩寺)古墳	前方後円墳	史跡	竜丘	塚原二子塚古墳	前方後円墳	史跡
上郷	番神塚古墳	前方後円墳		竜丘	馬背塚古墳	前方後円墳	史跡
上郷	溝口の塚古墳	前方後円墳		竜丘	御狼堂古墳	前方後円墳	史跡
松尾	御射山獅子塚古墳	前方後円墳	史跡	竜丘	塚越1号古墳	前方後円墳	
松尾	おかん塚古墳	前方後円墳	史跡	竜丘	権現堂1号古墳	前方後円墳	
松尾	姫塚古墳	前方後円墳	史跡	竜丘	丸山古墳	前方後円墳	
松尾	上溝天神塚古墳	前方後円墳	史跡	竜丘	兼清塚古墳	前方後円墳	
松尾	水佐代獅子塚古墳	前方後円墳	史跡	竜丘	塚原3号古墳	帆立貝形古墳	
松尾	茶柄山3号古墳	前方後円墳		竜丘	金山二子塚古墳	前方後円墳	
松尾	八幡山古墳	帆立貝形古墳		川路	久保田1号(正清寺)古墳	前方後円墳	
松尾	代田獅子塚古墳	前方後円墳					

第2節 調査の目的と経過

調査の目的 平成28年、市内に分布する古墳のうち13基が史跡指定を受けた。これをうけ当市教委では、将来にわたって史跡飯田古墳群の適切な保存と活用を図るため、令和元年度に『史跡飯田古墳群保存活用計画』を策定した。本計画においては、飯田古墳群を構成する古墳のうち、既指定の古墳及び未指定の古墳について、追加指定に向けた調査を段階的に実施することとしている。これに基づき、国庫補助事業として令和元年度から令和3年度にかけて史跡飯田古墳群を構成する2古墳の史跡未指定地における範囲内容確認調査の実施を計画した。

調査の経過 令和元年度と令和2年度は姫塚古墳、令和3年度は大塚古墳の調査を実施した。令和4年度は過去3か年の調査成果を総括し、報告書刊行のための作業のみをおこなった。

(1) 令和元年度

当年度は姫塚古墳の史跡指定地外の調査を実施した。調査地点は飯田市松尾上溝3365番地2、調査面積は24.9㎡である。後円部東側のくびれ部付近にトレンチ1条を設定した。土地は畑として利用されているため、耕土の扱いや復旧方法等について事前に地権者と協議し、同意を得た。令和2年2月20日から調査に着手し、一貫して人力による作業を進めた。埋戻しは先に山砂等を入れて遺構を保護し、耕土を戻した。同年3月31日に調査を終了した。

(2) 令和2年度

当年度は元年度に引き続き姫塚古墳を対象に調査を実施した。調査地点は飯田市松尾上溝3369番地、調査面積は70㎡である。前方部東側に1条、前方部南側の前端に1条のトレンチを設定した。令和3年3月1日より調査に着手し、重機による掘削を実施後に作業員による記録作業を進めた。調査地は田として利用されているため、埋戻しの際は最初に山砂等を入れ、その上に水抜け防止材（ベントナイト）を貼ったうえ、耕土を乗せて復旧した。同31日に調査を終了した。

(3) 令和3年度

当年度は大塚古墳を対象とし、史跡指定地外において調査を実施した。調査地点は飯田市桐林2012番地、調査面積は36.4㎡である。周溝が想定される後円部北側の畑地にトレンチを設定し、周溝の規模と範囲を把握した。農地の一時転用許可申請の手続きをおこない、許可後の令和4年2月1日から調査に着手した。重機の使用ができないため、掘削はすべて人力で実施した。記録作業の終了後、遺構の保護のため調査区に山砂を入れたうえで耕土を戻した。同年3月25日に調査を終了した。

(4) 令和4年度

当年度は令和元年度から3年度にかけて実施した範囲確認調査の成果を総括することを目的に本報告書の刊行作業を実施した。作業は当市職員が担当し、調査記録図面の整理、製図、および遺物注記、復元、実測、写真撮影等を実施した。報告書の編集にはAdobe社製ソフトウェア（Illustrator、Indesign、Photoshop）を使用した。令和5年2月に印刷業者を選定し、本書を刊行した。

第2章 調査の成果

第1節 姫塚古墳の調査



図2 姫塚古墳の位置

(1) 古墳の概要

姫塚古墳は松尾地区上満地籍に所在する。上満天神塚古墳、おかん塚古墳と同一の段丘端部寄りに築造された残存長40mの前方後円墳である。墳丘の大半は神社として利用され、竹林となっている。封土は留めているものの、特に墳裾の改変が著しく、後円部の一部を除いてほぼ全周が建物や畑地によって削られたことにより、墳丘の本来の範囲が不明瞭となっている。また、周溝の範囲についても周辺の地形や土地利用などから推察することができない。埋葬施設は後円部東側に片袖式の横穴式石室が開口する。小ぶりの川原石を積み上げて構築され、ベンガラによる赤彩が視認できる。出土遺物としては七鈴鏡が知られる（市村ほか 1955）。後期前半の築造と推定される。

当古墳において過去に発掘調査はされていない。今次調査は、主に墳丘東側から南側の墳丘・周溝の範囲を把握することを主な目的として令和元年度と令和2年度に範囲確認調査を実施した。

(2) 令和元年度調査（図4、写真図版1・2・3）

トレンチ1 後円部東側のくびれ部付近にトレンチ1を設定した。調査の結果、墳丘基底部および周溝を確認した。調査区の墳丘寄りに大小の自然礫が集中する箇所が認められる。調査区壁の土層の観察から墳丘の立ち上がりと周溝の落ち込みが確認できるため、礫が集中する付近が墳裾とみられる。これらは墳丘に葺かれていた葺石と考えられるが、石の並びが原位置を留めるものではなく、すべて崩落や後世の耕作等によって元の位置を離れていると判断した。礫には直径30～40cm程度の大型の花崗岩礫が含まれており、墳裾に配されていた基底石と考えられる。それ以外は墳丘から崩落した葺石とみられ、直径20cm前後の丸みを帯びた花崗岩の川原石である。

周溝は外縁端部までをトレンチによって把握した。墳裾から外縁までを周溝として、幅は北側壁面で約8m、南側壁面で約10mを測る。墳裾付近から最深部にかけて40cmほど掘り込まれ、明瞭な平坦面を

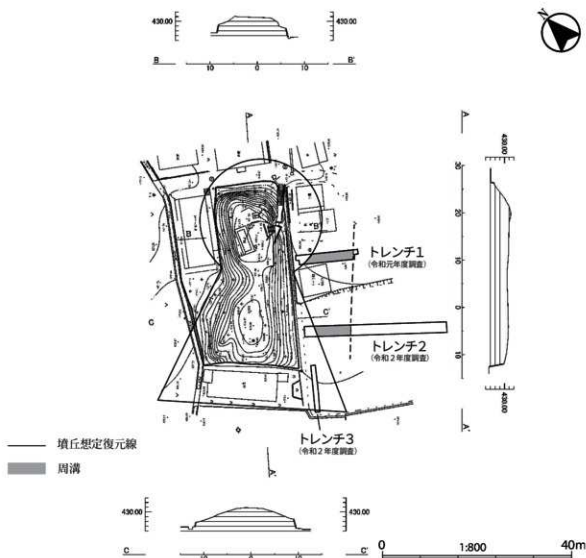


図3 姫塚古墳調査位置および想定復元

つくらずに外縁へ向けて緩やかに上がる。耕作の影響が深くまで及ぶものの、埋土の状況から埋め戻しの痕跡はなく、自然に埋没したとみられる。

墳裾と周溝の掘方の方向は異なる。墳裾が後円部のくびれ部から東側へふくらむ途中の円弧状のラインを描くのに対し、周溝の掘方は主軸の方向と一致する。

(3) 令和2年度調査 (図5・6・7・8、写真図版4・5・6・7)

前方面東側に1条(トレンチ2)、前方面南東に1条(トレンチ3)の調査区を設定した。

トレンチ2 前方面の墳丘基底部および周溝を把握した。基底石は直径40cmほどの川原石を配しており、少なくとも最下段の列は原位置を留めていると判断した。したがって、この基底石の並びが前方面東側の墳裾と考えられる。基底石最下段が置かれた墳裾と周溝との間は傾斜がついて段をなす。周溝は外縁まで把握した。墳裾から外端までの幅はトレンチ北壁で7.5m、最深部は墳裾から30cm、地表から80cmを測る。断面形はトレンチ1の周溝とほぼ同様である。本トレンチにおいては、周溝底部や外縁寄りにわずかに平坦な面が形成されているようにみえる箇所もあるが、意図されたかは不明である。周溝の最

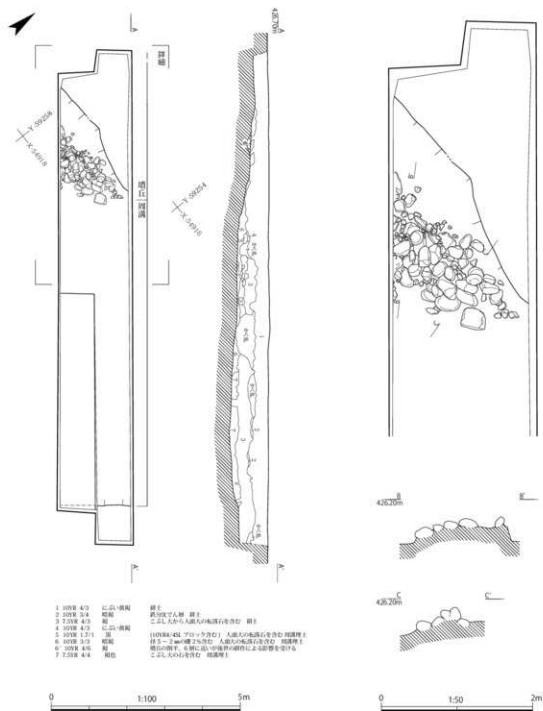


図4 姫塚古墳トレンチ1

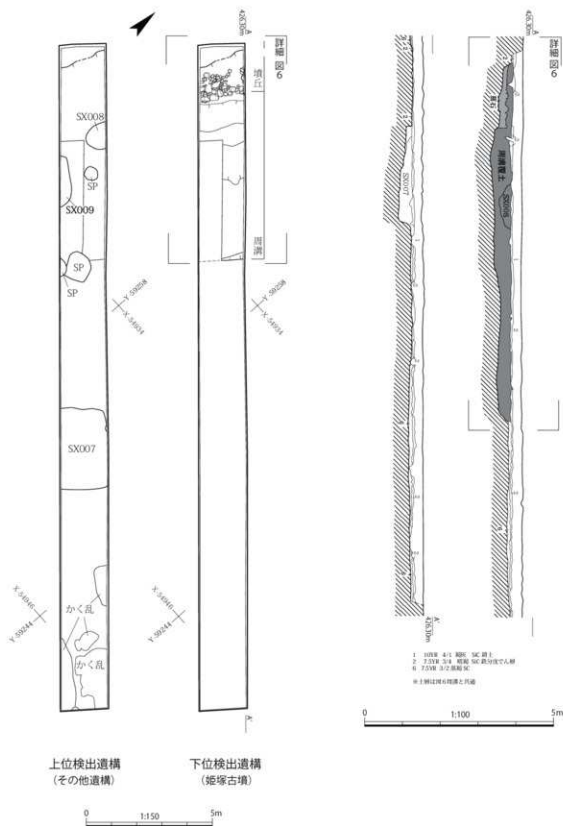


図5 矩塚古墳トレンチ2(1)

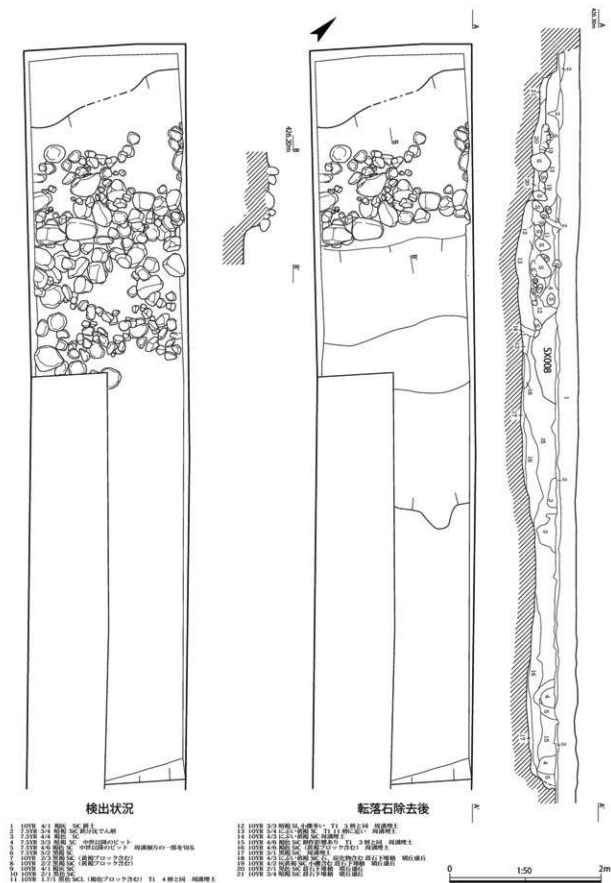


図6 姫塚古墳トレンチ2 (2)

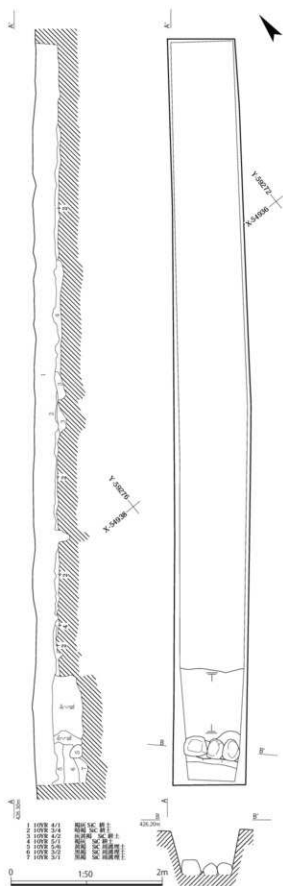


図7 姫塚古墳トレンチ3

深部から外側にかけての掘り込みは比較的緩やかである。墳裾のラインと周溝外縁の掘方は方向が異なり、墳裾が前方部の開く方向に伸びるのに対し、周溝外縁の方向は墳丘の主軸とほぼ等しい。なお、上層では中世以降の遺構(図8)、ピットを検出した。竪穴状の遺構SX007には規則的な石積みがあるが、当古墳に關係するものではない。

トレンチ3 調査区の南端付近において前方部前端の墳丘基底部と周溝の一部を検出した。墳丘は削平されており、最下段の基底石1列3個のみが原位置を留める。石はほぼ同程度の大きさの花崗岩礫を並べている。周溝の大半は調査区外であり、基底部から周溝へ20cmほど急傾斜をもって落ち込むことを確認したにとどまる。本調査により、前方部は残存する墳丘の裾から約5mまで範囲が広がることが判明した。

(4) 出土遺物(図8、写真図版13)

トレンチ2 転落した葺石を含む堆積土層から須恵器片が出土した。墳頂もしくは墳丘斜面から墳裾付近に墳丘崩落土とともに落ちたとみられる。1は高環の脚部で、いわゆる長脚二段高環である。色調は白色の度合いが強く、全体に薄く自然釉がかかる。脚部の三方に長方形の透しを有する。2は三方透しのある小型高環の脚部である。3はタテ方向の平行沈線が施された臚の頸部で、口頸部が大きく発達したもの。4は器台もしくは脚付壺の脚部である。5・6は甕の口縁部と底部で、5は頸部に波状文が、6は内面に同心円状のタタキ目がある。

以上の出土須恵器は、田辺昭三による大阪府南部窯跡群の編年(田辺 1981)におけるTK43~209型式を中心とする時期に比定される。

トレンチ1・3 古墳に關する遺物はなく、中世以降の陶磁器が若干出土した。

第1節 姫塚古墳の調査

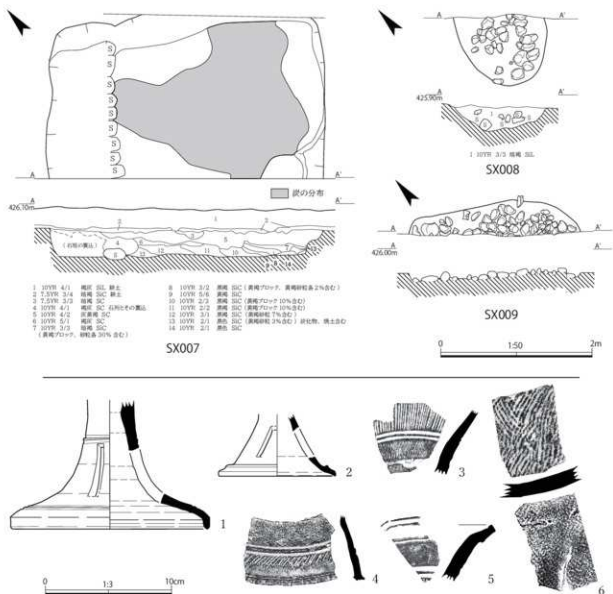


図8 姫塚古墳トレンチ2 その他遺構・出土遺物

(5) 調査の総括

令和元年度と令和2年度の調査により、姫塚古墳の周溝の範囲と墳丘基底部の位置を3か所において把握した。成果によれば、当古墳の推定全長は50mを超える規模となり、周溝の幅は7.5m程度となる。また、主軸の想定も従来はN45°Eであったが、今回の調査結果をふまえると、主軸はやや東にふれてN50°Eを向く可能性がある(図3)。周溝の平面形については不明だが、今次調査によって盾形を呈する案が考えられる。また、今次調査では外側の周溝(区画溝)や周堤帯、埴輪が樹立された痕跡は確認されなかった。これらによって当古墳の範囲や構造を推定する一定の根拠が得られたものの、墳丘西側及び北側には調査が及んでいないため推測の域を出ず、今後も実態把握のための取り組みは必要と考える。

なお、墳丘崩落土中から出土した須恵器は当古墳の築造時期を直接示唆する資料ではないが、その年代から6世紀後半頃に祭祀行為がおこなわれたとみられる。

第2節 大塚古墳の調査



図9 大塚古墳の位置

(1) 古墳の概要

大塚古墳は竜丘地区桐林地籍に所在する。残存長50mを測る前方後円墳で、東側に丸山古墳、南東側に兼清塚古墳がそれぞれ隣接する。主軸はN50°Eを向く。前方部は削平されて畑地化されており、わずかに裾部が平面形状をとどめる。一方で後円部は植林されて墓地となり、一部に墓地区画の段が造成されているほかは比較的良好な状態で保存されている。墳丘の西から北側にかけて周溝が想定される範囲は田として利用されているが、田の境界は段となっており、ここに周溝の外縁部を認めることができる。出土遺物としては、平成18年度に前方部で耕作中に発見された五鈴鏡の破片がある（飯田市教育委員会 2007）。ほかに水鳥形埴輪の頭部などの形象埴輪片が採集されている（市村ほか 1955）。

当古墳の築造時期は中期とされるが、発掘調査歴はない。周溝の範囲及び墳丘の規模を把握することを主な目的として令和3年度に範囲確認調査を実施した。

(2) 令和3年度調査（図10・11、写真図版9・10・11・12）

後円部北側にトレンチを設定した。当初は周溝とともに本来の墳掘を把握することを企図したが、現在の封土の端に沿って水路が引かれており、これより外側を調査区とした。また、トレンチの中央付近にも水路があり、この箇所も調査対象から除外した。そのため、調査区の掘削範囲は2か所に分かれた。

調査では、周溝の墳掘近くから外縁までを把握した。これにより、現在の後円部墳丘端から約12mの範囲が周溝の範囲と判明した。今次調査では墳掘を把握できなかったが、現況と大きく差はないと推察される。周溝は墳掘側から底部にかけてやや傾斜が急であるのに対し、外縁から底部にかけては緩やかな傾斜で掘削される。底部は幅約7mの平坦面を形成する。遺構検出面から周溝底部までの深さは約60cmを測る。墳丘に近い箇所では、転落した葺石の分布を確認した。周溝底部の直上付近に分布しており、築造からさほど年月を経ない段階で崩落したと考えられる。葺石は直径20～30cmほどの丸みのある花崗岩礫で、最大70cm程度上までの基底石とみられるものを数個含んでいた。埴輪片は底部直上付近から20cm程度上までのレベルに集中する。転落石と埴輪はほぼ同一の層位に含まれており、葺石の崩落と同時に埴輪も転落したとみられる。

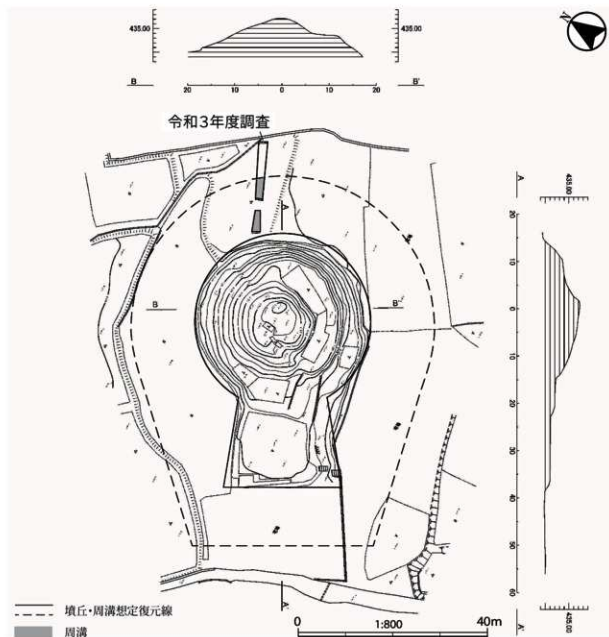


図10 大塚古墳調査位置および想定復元

(3) 出土遺物 (図12・13、写真図版13・14)

出土した埴輪は普通円筒埴輪が大半を占め、わずかに朝顔形埴輪、形象埴輪とみられる破片がある。色調は灰黄褐色を呈し、最大径5mmの白色礫を多く含む。焼成はやや軟質で、表面の摩滅が著しく、調整痕が明瞭に残るものは少ない。黒斑は未報告の破片を含め、認められない。

円筒埴輪 3条4段で構成される。底部径に比して口縁部径がわずかに広い。器壁は底部で最も厚く、口縁部で最も薄くなる。透孔は円形もしくは不整形円形で、第2段と第3段に互い違いに穿たれる。穿孔位置は段の中央付近、突帯の直上、直下など一定しない。突帯の断面形態はかなり多様性があり、台形(1・3・4)がやや多く、上の稜が下の稜よりも突出する不整形台形(2)、三角形(5)、なども認められる。突帯間隔は10~12cmを測る。突帯が剥がれ落ちた5の器体には、突帯間隔を設定する際に施されたと考えられる、一条の凹線が残る(写真図版14-5拡大)。外面調整は先述のとおり表面の遺存状

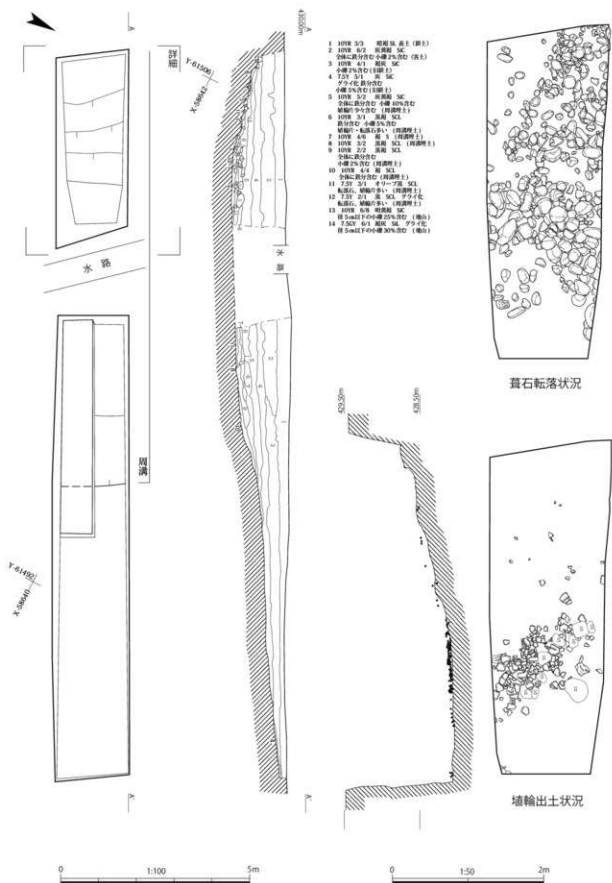


図11 大塚古墳トレンチ

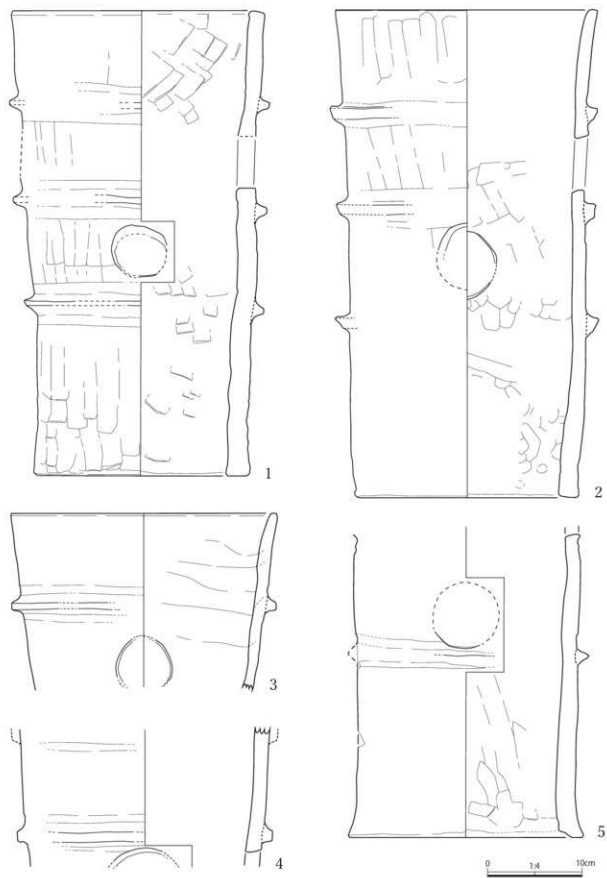


図12 大塚古墳出土遺物（1）

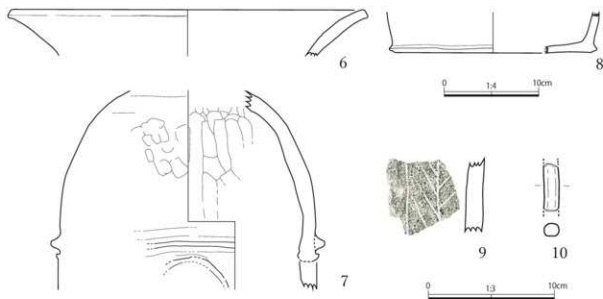


図13 大塚古墳出土遺物(2)

態が悪くほとんど不明瞭だが、1・2のように最上段や最下段にそれぞれタテ方向の板ナデ状の調整痕が残る個体もある。2・3段目にも板状工具によって調整がされた痕跡が認められるが、一部を除いて単位や方向などを看取することは困難である。内面は総じて板状工具による調整痕が残る。底部は総じて胴部の器壁に比してやや厚くなり、断面台形状を呈する。底部に特筆すべき製作技法が用いられた痕跡は認められない。

朝顔形埴輪 6は外反する口縁部である。7は頸部に近い胴部最上段付近である。突帯に近接して透孔が穿たれる。内面は指で上方にむかって強くナデあげられた痕跡が残る。

形象埴輪 8～10は形象埴輪片とみられるもの。8は直角に近い角をもつ壺状の破片である。9は扁平で片面に綾杉状の線刻が施される。10は微小な棒状の破片である。

(4) 調査の総括

今次調査により、大塚古墳後円部北側の周溝の範囲が判明した。埴裾は水路のため把握できなかったが、現埴丘端からの周溝の幅は約12mである。今次調査の結果に基づくと、周溝を含めた当古墳の規模は80m以上と推測される(図10)。また、周溝外端よりさらに外側に周溝や周堤帯の痕跡は認められなかった。一方で、埴丘東から南側の宅地となっている地点の状況は不明であり、特に削平されている前方部の本来の裾はさらに南側にあるとも考えられる。当古墳の全体を復元するための情報は未だ十分ではなく、引き続き取り組みが必要といえる。

埴輪が得られたことも大きな成果である。今次調査で出土した円筒埴輪は3条4段構成で、外面ナデ調整を主とする点などを除けば、概ね中期に位置づけられる標準的な埴輪と評価できる。いわゆる「下伊那型」(赤塚 1992)埴輪にみられる個性的な要素はみられず、田中裕の分類における「B群」(田中 2013)の埴輪に該当する。さらに、突帯間隔の設定技法を用いる個体も確認できた。これらの所見は飯田古墳群構成古墳の相互の関係をみるうえで有益であり、成果のさらなる追加が待たれる。

参考・引用文献

- 赤塚次郎 1992 『円筒埴輪 東海』『古墳時代の研究 9 古墳Ⅲ 埴輪』 雄山閣
- 飯田市教育委員会 2007 『飯田における古墳の出現と展開』
- 飯田市教育委員会 2012 『飯田古墳群』
- 飯田市教育委員会 2020 『史跡飯田古墳群保存活用計画』
- 市村威人(編) 1955 『下伊那史』第2巻 下伊那誌編纂会
- 田中裕 2013 『伊那谷の埴輪とその系譜』『飯田古墳群 一論考編一』 飯田市教育委員会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店

写真図版



姫塚古墳遠景



姫塚古墳 トレンチ1全景（東上空から）



姫塚古墳 トレンチ1 (直上から)



姫塚古墳 トレンチ1 (墳丘側から)



姫塚古墳 トレンチ1 葦石（転落石）検出状況



姫塚古墳 トレンチ1 葦石 基底部付近



姫塚古墳 トレンチ2・3 (南上空から)



姫塚古墳 トレンチ2・3 (東から)



姫塚古墳 トレンチ2・3周溝（直上から）



姫塚古墳 トレンチ2 基底部葺石・転落石検出状況



姫塚古墳 トレンチ2 基底部篝火



同上



姫塚古墳 トレンチ2 周溝 土層



姫塚古墳 トレンチ2 葦石・前方部墳丘



姫塚古墳 トレンチ3全景



姫塚古墳 トレンチ3 基底石付近 土層



大塚古墳全景（北から）



大塚古墳全景（西から）



大塚古墳 トレンチ・後円部墳丘（北から）



大塚古墳 葦石転落状況



大塚古墳 埴輪検出状況



大塚古墳 周溝外縁部付近 土層



大塚古墳 墳裾付近 土層



姫塚古墳 出土須恵器



大塚古墳 出土埴輪



大塚古墳出土埴輪

報告書抄録

ふりがな	いいだこふんぐんほんいかくにんちょうさほうこくしょ					
書名	飯田古墳群範囲確認調査報告書					
副書名	令和元～3年度					
編著者名	春日 宇光					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月	2023年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
ひめづかこふん 姫塚古墳	飯田市松尾上溝3365 -2 飯田市松尾上溝 3369	20205	35° 30'	137° 50'	2020/2/20 }	94.9㎡
		699	11"	48"	2021/3/31	範囲確認調査
桐林大塚古墳	飯田市桐林2012	20205	35° 28'	137° 49'	2022/2/1 }	36.4㎡
		832	10"	20"	2022/3/25	範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
姫塚古墳	古墳	古墳時代	姫塚古墳周溝・葺石		須恵器	古墳時代後期
桐林大塚古墳	古墳	古墳時代	桐林大塚古墳周溝		円筒埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪	古墳時代中期
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・令和元年度から3年度にかけて飯田市教育委員会が実施した史跡飯田古墳群の範囲確認のための調査報告 ・姫塚古墳東側くびれ部付近から前方部前端東隅の周溝、基底部を確認 ・桐林大塚古墳後円部北側の周溝を確認。転落した葺石、埴輪を検出 					

飯田古墳群

範囲確認調査報告書

令和元～3年度

発行日	2023(令和5)年3月
編集・発行	長野県飯田市大久保町2534番地 飯田市教育委員会
印刷・製本	飯田共同印刷株式会社

